

平成 30 年 11 月 14 日

第 13 回 有機化学系教科担当教員会議 議事録
(薬学教育協議会主催)

1. 日時：平成 30 年 11 月 4 日(日) 13:30～16:50

2. 場所：崇城大学 D号館 (池田キャンパス)

3. 議題：『有機化学を基盤とした人財育成を志向したコアカリ構築のために』

(1) 開会の挨拶(13:30～13:50/20分) 崇城大学 寒水 壽朗

(2) 特別講演 I (13:50～14:50/講演・報告・意見交換 60分)

演題「改訂モデル・コアカリキュラムの再改訂に

有機化学系教科担当教員会議はどのように準備するか」

講師 山口東京理科大学 望月 正隆 先生

座長 熊本大学 大塚 雅巳

～休憩及び準備(14:50～15:00/10分)～

(3) 特別講演 II (15:00～16:00/講演・報告・意見交換 60分)

演題「医学部における有機化学の教育と研究」

講師 京都府立医科大学 鈴木 孝禎 先生

座長 崇城大学 寒水 壽朗

～休憩及び準備(16:00～16:10/10分)～

(4) 平成 30 年度若手教員会議報告(16:10～16:30/報告 20分)

SGD 議題

「6 年制薬学部の脱薬剤師養成専門学校化のために有機化学ができること」

報告 富山大院薬 杉本 健士 先生

(5) アンケート集計報告(16:30～16:45/報告 15分)

報告 九州保健福祉大学 山崎 哲郎

(6) 本会議の今後の進め方および次年度以降の開催について

(16:45～16:50分/5分)

来年度 世話人：町支 臣成 先生(福山大学)

山川 直樹 先生(就実大学)

来年度開催日：平成 31 年 10 月 27 日(第 45 回反応と合成の進歩シンポジウム前日)

開催場所：就実大学

来年度世話人の挨拶

議事録/報告書の作成の件

4. 懇親会(17:00～18:30)

会場：崇城大学 D号館(予定)

挨拶・乾杯 崇城大学薬学部長 瀬尾 量 先生

6. 会議報告

(1) 開会の挨拶

会議世話人の崇城大学 寒水 寿朗より開会挨拶があり、有機化学系教科担当教員会議の発足の経緯やこれまでの会議における議論の内容報告がなされた。

平成29年度(第5回)薬学教科担当教員中央会議 議事録中に記された、「将来のモデル・コアカリキュラム改訂に向けた教科担当教員会議の在り方について」と「コアカリに関する議論が減ってきているように感じる。実際に教育してみて感じた改善点等を踏まえて、次の改訂の際にすぐに意見を出せるように準備してほしい。」という教科担当教員会議への要望を受け、議題を『有機化学を基盤とした人財育成を志向したコアカリ構築のために』と設定した旨の説明がなされた。

例年と会議の運営を若干変更し、講演2演題、課題抽出のためのアンケート報告、および会議終了後会議内容に関するアンケートを行い次年度へ繋げたい要望がなされた。

(2) 特別講演

① 特別講演 I

演題「改訂モデル・コアカリキュラムの再改訂に

有機化学系教科担当教員会議はどのように準備するか」

講師 山口東京理科大学 望月 正隆 先生

座長 熊本大学 大塚 雅巳 先生

大学における医療人養成の在り方に関する調査研究の結果を受け、「教育内容の改善・充実のためには、医学、歯学、薬学教育の各モデル・コアカリキュラムの改訂に際し、分野別の改善・見直しのみならず、チーム医療等の推進の観点から、分野間で医療人として共有すべき価値観を共通で盛り込むなど、卒前教育の段階でより整合性のとれた内容とすることが重要である。」指針を受けて、前回のモデルコアカリの改定、「医学教育モデル・コア・カリキュラム」今回の改訂までの経過の説明がなされた。また、医学教育における「有機化学」の扱い等についても詳細に説明がなされた。医学教育のコアカリには、将来の充実を期待する分野項目が明示されており、その項目はあるべき姿と社会のニーズを前提(予想)のものに制定されている旨の説明がなされた。

会場からは、「コアカリ改定において、有機化学分野は、多様なニーズに対応できる薬剤師の養成に①化学物質(医薬品)の構造を理解する。②物質の創製を学ぶ。③生命現象を理解する。項目を盛り込んだものが望ましいのではないか。」という旨のコメントがあった。

② 特別講演Ⅱ

演題「改訂モデル・コアカリキュラムの再改訂に

有機化学系教科担当教員会議はどのように準備するか」

講師 京都府立医科大学 鈴木 孝禎 先生

座長 崇城大学 寒水 壽朗

医学部での「有機化学」講義の取り組み内容について、具体的な例をもとに講演があった。基本的な流れは、薬学の SBOs と同じではあるが、学部のカリキュラムでは、1年次の開講科目として扱われていた。「何のために、有機化学を学ぶのか？」という命題に対して、有機反応を紹介する際には、必ず生体内での同様の反応を紹介するなど、生体と有機化学との関連を意識した講義が行われていることが確認できた。講演の中で、「医師免許には興味があるが、医学には興味がない学生を如何に教育するか」という課題、「『Chemist』とは『化学者』、『薬屋、薬局、薬剤師』を示す。」ということが紹介された。本件は「薬剤師免許には興味があるが、薬学には興味がない学生を『Chemist』として如何に教育すべきか」その方略のヒントが認められた。

講演後、会場から、「薬学のコアカリ改定にあたり、必要と考えられる有機化学と生体(臨床)を繋ぐ講義内容が盛り込まれている。」等のコメントがあった。

(3) 平成 30 年度若手教員会議報告

「6年制薬学部の脱薬剤師養成専門学校化のために有機化学ができること」の議題にて、参加者に事前質問票を配布し、その資料に基づきに討論を行なった。討論は、6 グループで行ない、グループ内の討議内容を取りまとめ役が発表した。個々の質問に対するまとめを小括として、以下に記す。

質問1) 学部学生(特に6年制コースの学生)に有機化学に関心を持ってもらうために、これまで実践してきた講義内容(もしくは提案)にはどのようなものがあるか。

小括1) 有機化学の基礎をしっかりと理解してもらうのが有機化学へ関心をための第一歩であるという考えから、ミニテスト等を通じて理解度が上がるよう努力しているという意見や、講義内容に関連する医薬品の合成、活性発現機構あるいは生化学反応を授業の中で紹介し、興味を引くよう努力しているという意見が多くの方から出された。主に私立大学の先生方からは、国家試験のための有機化学の勉強が丸暗記になりがちであるため、考える力をつけることを心がけているという意見が出された。

質問2) 6 年制コースが開設されて以来、我々教員は、薬剤師教育のための有機化学をどのように捉えてどのように指導方法を変化させてきたのか。

小括2) 国立大の先生方からは、4年制と6年制の学生が同じ授業を受けており、特に6年制を強く意識した授業へは変化させていないと答えた先生が多かった。指導方法を変化させたと答えた先生からは、医薬品の作用に加え物性についても有機化学的に理解できることを伝えるようにしていると

このような意見が出された。国公立・私立共にコアカリに合わせるように授業内容を変化させた先生方は多く、そのような変化に対し国家試験対策の授業になってしまって本来教えるべきことを十分に教える時間がないというネガティブな意見が多かった一方で、国家試験で点数を取れるように授業をすべきというポジティブな意見も数名の先生から出された。

質問3) 今後、どのように有機化学教育を行なっていくべきか。

小括3) 有機化学が臨床現場でどのように役立つのかということ、臨床の薬剤師との連携を通じて情報を共有し、教員自身がまず学び、学生に伝えていけたらよいのではないかという意見が出された。実際にそのような事例を持っており、学生に伝えているという先生もいた。医療チームの中で有機化学を知っているというのが薬剤師の強みであり、そのような事実をもっと強調していくべきであるし、国家試験でも新コアカリになり有機化学を理解できないと解けない問題が増えており、薬剤師として活躍するために有機化学の重要性は増しているというような意見も多く出された。また、有機化学といえば低分子医薬品を想像しがちであるが、最新の核酸医薬や DDS あるいは核酸やたんぱく質を始め、生体高分子の相互作用を考えるうえでも有機化学は基礎となるものであることを強調してはどうかといった意見も出された。

総括: 国立大・公立大・私立大の様々な立場から国家試験をどのように捉え、有機化学をどのように教えているか。あるいは、薬剤師教育に対する有機化学のあり方について多様な意見が出された。立場が異なると薬学有機化学教育の捉え方も大きく異なり、本会議で異なる立場の教員と有機化学教育に対する考え方を共有できたことは、若手教員が今後の教育方針を考える有意義な機会であった。

(4) アンケート集計報告

九州保健福祉大 山崎世話人より、会議の事前に行ったアンケート結果が報告された。

新旧コアカリに基づくカリキュラムの変更およびについて、抽出を行なった。実習については目立った変更はなかった。また、講義については、旧コアカリの内容で対応しているところもあれば、新コアカリにあわせたカリキュラムに変更したことで、有機化学としての学問体系に問題(不備)が認められていることがあげられた。

一部の大学でオリジナルの問題解決の方法および対応(各大学オリジナルの試み)がなされ、その一例として、SGD や TBL を用いる講義の開講や有機化学の観点から薬理作用、代謝、薬物相互作用、酵素反応等を扱う講義科目に盛り込むなど実施対応されていることが確認された。(詳細は、別途資料に記載。)

(5) 来年度開催について

来年度世話人 町支 臣成 先生 (福山大学), 山川 直樹 先生 (就実大学)

開催日と開催場所 2019年10月27日 就実大学

来年度両世人より, 来年度の本会議の開催についての抱負などを加えた挨拶があった。

(文責: 寒水 壽朗)